回覧														

アクティブ長洲小

長洲町立長洲小学校だより
令和2年9月30日　第9号
文責　校長　川冨　一弘

全力・挑戦・助け合い
みんながかがやくエンジョイ運動会へ向けて

コロナの影響でこの時期へ延期となった今年の運動会を10月4日(日)に実施します。本校の教育方針の一つである子供の「主体性」をキーワードに、可能な限り子供に運動会の運営を任せることで、これまでの参加する運動会から参画する運動会へと舵を切る初めてのニュースタイルの運動会となります。

また、運動会自体を根本から目的と方法を問い直すと言う意味で、まずは子供達の学びにつながる運動会とはどうあるべきか、職員間で協議し、今回の運動会を計画しています。教師がリードすればスムーズに準備が進むのかもしれませんが、それでは受け身の運動会、運動が苦手な子供にしてみれば、思い出にはなっても、学びも楽しみもありません。そんな反省を受けて、今年は身体だけではなく、心も頭も使って運動会当日までの過程をも大切にした運動会を目指しています。

先日、開会式担当の6年生が、校長室をたずねてこんなお願いと質問をしてくれました。

6年生:「校長先生、開会式でのあいさつをお願いします。」
　私　:「閉会式で講評を言うつもりでいたけど, 開会式の方がいいの？」
6年生:「はい、開会式でお願いしたいです。」
　私　:「わかりました。時間はどれくらい？」
6年生:「(しばらく考えている)・・・・・・・」
　私　:「何分でもいいの？」
6年生:「〇分ぐらいで」

実際、できるだけ子供達の活動の時間を確保したいので、長々話す気持ちはありませんが、こうしたやりとりだけでも、私自身がとてもワクワクした瞬間でした。

今回、コロナ感染症予防のため、ご来賓への案内もせず出席をご遠慮いただいており、子供のご家族のみとさせていただいています。関係者の方々には大変恐縮ながら、ご理解ご協力いただければ幸いです。子供達が決めた今年の運動会のキーワード、全力、挑戦、助け合いを、練習から当日にかけてたくさん見つけて褒めていこうと意気込んでいます。

地域の理解と協力があってこその運動会

運動会と言えば、通常日曜日の朝から夕方まで行われるものだと多くの方が認識しておられると思います。実はこれは日本独特の文化です。というのは、諸外国では日曜日は安息日とか家族のための休日として行事などは入らないのが慣例だからです。私が以前、海外の日本人学校(海外で働く駐在員の子供が通う文科省管轄の学校)に勤めた経験があるのですが、日本人学校の運動会も、練習は平日に学校の運動場で行います。そのため平日の練習に入る前には、近隣の住宅一軒一軒に練習の通知と謝罪を書いた手紙を配り、理解と協力をお願いします。そして日曜日の本番は、屋外用のスピーカーを通した音楽や放送が許された郊外の陸上競技場で行うのです。おそらくこれが世界の当たり前なのです。こうして考えると日本の運動会が、一つの自国文化として浸透していることに気づかされます。と同時にあらためて地域の理解と協力に感謝しなければならないと思うのです。

日本は日本、と言えばそれまでですが、こうした運動会への理解と協力を学ばせることも本校は大切にしていきたいと思います。

5年生集団宿泊教室 in 菊池 無事終了しました～

　9月17日から1泊2日で県立菊池少年自然の家へ5年生35名が行ってきました。残念ながら雨天の中での活動となったようですが、そこは切り替え上手な5年生、雨天用のプログラムを十分満喫して帰ってきたようでした。当初の予定では、水俣病及び環境学習を学ぶ目的で芦北方面を予定していたのですが、コロナ騒動で水俣病資料館や環境センターが閉館となったので急遽菊池での活動へと行き先と目的を変更したのでした。班活動を通して、共感、交流、向上をテーマに普段の教室では学び得ない貴重な学びを体験して帰ってきたはずです。
　帰校後、施設の所長自ら電話があり、5年生がとても礼儀正しく素晴らしい生活態度であったこと、担任もとてもメリハリのある指導ぶりであったことなど、恐縮するほどお褒めの言葉をいただきました。運動会でも6年生を支え、また刺激する5年生として大いに活躍してくれることと楽しみにしています。今後の5年生からますます目が離せなくなりました。

被災地に思いを寄せる

　正代関の大相撲9月場所での優勝は本県にとって大きな嬉しい出来事でした。特に感銘を受けたのは、彼のコメントの中に、「被災地熊本のために」という言葉があったことでした。4年前の熊本地震、そして今年7月には県南で豪雨災害が起きましたが、特に直接的な被害がなかった私たちの中には、同県内の出来事であるのに、日に日に過去の話になっている感覚がありはしないでしょうか。

　自校での行事の一つ一つがコロナ禍においてアレンジを加えながらも実施できていることは本当に有り難いことです。そんな時、ふと被災地ではどうなんだろう、ちゃんとできているのだろうか、と行事の度に考えてしまいます。その思いは、先日修学旅行の県内版の視察に人吉球磨に出かけてより強くなりました。
　多くの人命が奪われ、家屋が流されたり、潰れたりして、今でも仮設住宅もしくは避難所で生活している方がおられるのに、巷では GO・TO キャンペーンなどで旅行割引や食事割引などが報道されています。身近で関心の高いコロナウイルス感染症関連の情報はほぼ毎日のように報道されていますが、豪雨災害の報道は徐々に減っているように感じます。
　今日、インターネット頼りの生活が日常化し、何かあればスマホを手に持ち、簡単に素早く情報が手に入れることができます。しかし、こうして得た情報は手軽な分、どうしても自分と対象との距離を遠く隔たってしまいます。県南での災害への関心が薄れるのもこうした影響だと思います。

　正代関の話に戻りますが、彼はそんな被災地の方々の思いを胸に自分でできる復興へのお手伝いをしました。もちろん私たちにはそんな力はありませんが、だからといって何もしないでいいのかと自責の念に駆られます。

　私たちに何かできることはないか、日々の自分たちの生活を振り返るとともに、職員と子供達と考えていきたいと思っています。